The Japan Society of Educational Sociology

再帰的近代化におけるボランティア活動の意味
—成人学習論の観点から—

田中雅文（日本女子大学）

1. 再帰的近代化におけるリスク

ギデンズによれば、再帰性とは「社会的な営みが、それ自身に起因する新たな情報によって絶えず吟味・修正され、結果としてその営みが本質的に変容すること」（Giddens 1990, p.38）である。つまり再帰的近代化とは、近代から生まれた知識・技術や諸要因によって、近代システムそれ自体が変容していくことを意味する。

再帰的近代化の過程では、制度的再帰性と自己再帰性という二つの側面で再帰性が生じる（Lash 訳書 1997, p.215）。前者は、個人や集団の行為が社会構造に影響を及ぼし、その結果が社会構造自体にはね返って新たな社会構造の変容へと連なっていくことである。例えば、都市化による快適性を内包する社会構造が、それに起因する深刻な環境問題によってさらなる変容を促される。後者は、個人や集団の行為の結果が、当の個人や集団にはね返って影響を及ぼすことを意味する。例えば、制度的再帰性によって目まぐるしく変わる社会・生活環境のもとで、個人や集団は自らの行為を常にモニタリングしながら変化させざるをえない。

ギデンズは、自己再帰性によって常に変容を余儀なくされる現代の自己を、＜再帰的プロジェクト＞としての自己と呼ぶ（Giddens 1991, pp.32-34）。ここに立脚すれば、再帰的に変化する諸制度や専門的な知識体系といった抽象システムに漂う雑多な情報をもとに、その都度自己を更新していく、という困難な作業が個人に課せられていることになる。

上記のように、社会レベル、個人レベルの両方で再帰的近代化によるリスクを抱えているのが現代の社会である。本報告の目的は、ボランティア活動がこのようなリスクの回避に貢献する可能性について、主として個人レベルに着目し、成人学習論の概念（実践コミュニティ、状況的学習、省察、変容的学習など）を用いて考察することである。考察にあたっては、ボランティアを対象としたインタビュー調査の結果を活用する。

2. ＜再帰型学習＞のモデル

成人学習論の諸概念とインタビュー調査の結果から、次の仮説を提示できる。

①新しい社会の創造を目指す「創造型」のボランティア活動は、独自の社会的使命に応じた公共空間（公共圏）を醸成する。そこでの討論や試行錯誤の積み重ねにより、関係者の間に一種の実践コミュニティが生まれる。

②ボランティア活動は、公共空間を媒介として社会的な成果をあげる。ボランティアは活動成果からの反作用によって省察を促され、それを経て新たな活動に取組み、またその結果が反作用を生む。反作用と省察のこうした連鎖を＜再帰的循環＞と呼ぶ。

③＜再帰的循環＞はボランティアの世界観（準拠枠）の変容を促す。世界観が根本的に変わったときは意識変容と呼ぶにふさわしい。ボランティアはそうした世界観に支えられて自分の役割と位置を明確に認識し、安定的な自己アイデンティティを得る。

④反作用・省察を経なくても、直接体験によって意識変容が起こる場合もある（自然体験を通して、環境問題への新たな意識が醸成されるなど）。

⑤上記の世界観は、ボランティア活動が提供する、仕事や主婦業から解放された新しい生活空間のなかで、実際に他の人々や次世代と共に活動すること（バーガーのいう共謀関係（Berger 訳書

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

2007, pp.91-96)）によって生まれ、かつ維持・強化されるものである。

上記のようなメカニズムで新しい世界観と安定的なアイデンティティが獲得される過程は、一種の状況的学習であり、このような状況的学習をここでは＜再帰型学習＞と呼ぶ（図１）。図が表現するように、組織的なボランティア活動は、具体的な活動成果からの反作用に加え、直接体験や人々とのつながりを通して世界観や自己アイデンティティを獲得していくことを可能とする。いわば、ギデンズのいう＜再帰的プロジェクト＞を、「抽象的な制度・知識からの情報への全面依存」ではなく、「具体的な人間関係と活動体験、そして活動成果からの反作用」によって遂行することができる。

3. ボランティア活動の意味

上記の結果から、再帰的近代化に伴う社会レベル、個人レベルのリスクに対し、ボランティア活動が＜自己と社会の再帰的変容＞（自己の再帰的な変容と社会の再帰的な変容が相互に影響を及ぼしながら進行する過程）を促すことによって立ち向かう可能性をみることができる。その中核となるのは、本稿で＜再帰型学習＞と呼んだ一種の状況的学習である。

（注）本稿は、田中雅文（2011）の第１章と２章をもとに取りまとめたものである。当日の発表は、こうした知見の詳細を報告するとともに、それをふまえた新たな視点を提示する予定である。

＜文献＞ Berger, L. P. 1963, *Invitation to Sociology: A Humanistic Perspective*, Doubleday（＝2007 水野節夫・村山研一訳『社会学への招待 普及版』新思索社）／Giddens, A. 1990, *The Consequences of Modernity*, Polity Press,（＝1993 松尾精文・小幡正敏訳『近代とはいかなる時代か？』而立書房）／Giddens, A. 1991, *Modernity and Self-Identity*, Polity Press（＝2005 秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳『モダニティと自己アイデンティティ―後期近代における自己と社会―』ハーベスト社）／Lash, Scott 1994, "Reflexivity and its Doubles," Ulrich Beck, Anthony Giddens & Schott Lash, *Reflexive Modernization*, Polity Press, pp.110-173（＝1997,「再帰性とその分身」松尾精文・小幡正敏・叶堂隆三訳,『再帰的近代化』而立書房, pp.205-315）／田中雅文 2011,『ボランティア活動とおとなの学び―自己と社会の循環的発展―』学文社

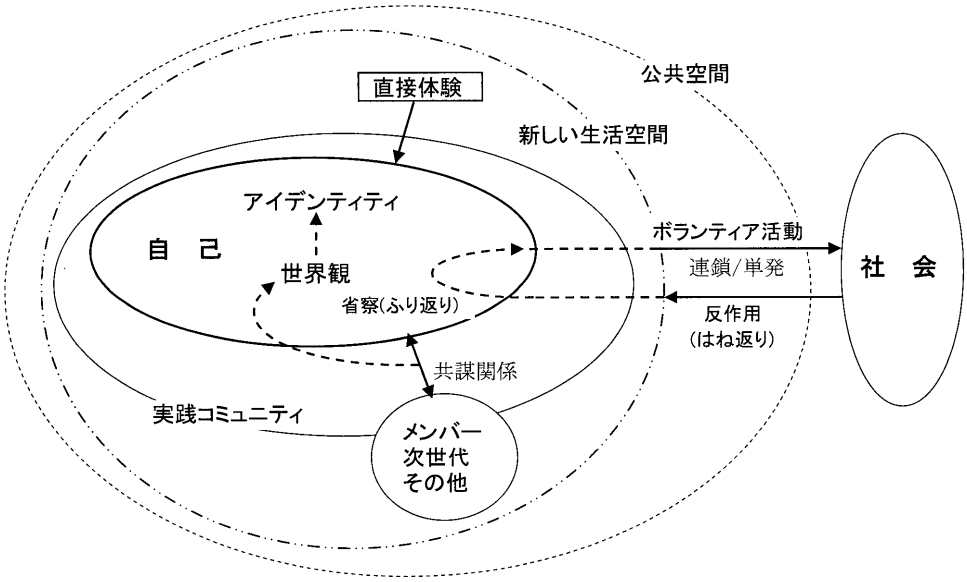

図１ ＜再帰型学習＞のモデル
出所：田中（2011, p.131）

NII-Electronic Library Service